

二曲城跡

本城は、白山市出合町（旧鳥越村出合）の集落南方にある通称「サンカクヤマ」と呼ばれる標高二六八mの険阻な山塊に位置する。東と北の面は急峻な斜面となり、東斜面下方には手取川の支流のひとつである大日川が流れている。南方は深い谷を挟んで白山山系の山岳に連なり、北西方の斜面は曲輪や堀切など城郭遺構を見ることができる。

本城の主郭は山頂にある曲輪①にあたる。主郭は平成一六年度（二〇〇四）と一七年度に発掘調査が行われ、その全容が明らかとなった。曲輪の中央部には、五間×二間の掘立柱建物が存在した。建物内部にあたる箇所では石組み炉の跡、建物の柱穴に接する所で地下式カマド跡を検出している。この建物の東隣には二間×二間の掘立柱建物を一棟確認しており、前者の建物が主殿、後者の建物を付属施設と位置づけている。付属施設の建物の東隣には人頭大の自然石を並べた南北方向の石列を検出している。この付属施設の建物から西隣には礎石建物や方形土坑などが見られ、さらにその奥には、主郭への登城口となる通路が存在する。通路は、下段の小曲輪につながり人頭大の自然石を置いた石敷路であった。出土遺物は、越前焼甕・すり鉢、土師器皿（灯明皿）、中国染付碗、青磁碗、石鉢、硯などで、時期は一六世紀が主体である。出土遺物は生活色の強いものではあるが、調査面積に対して総体的に数量は少ない。

曲輪①より北西方へ下る尾根には、前述した小曲輪をはじめ、複数の曲輪が段々状になって形成されている。発掘調査によって一部で石敷きの通路を確認できたので、下方の段々になっている曲輪と曲輪の間にも通路が存在すると考えられる。

小曲輪群を降りた先には曲輪②が存在する。曲輪②は、曲輪①に続いて広大な敷地を有しており、南西側には土塁を設けている。曲輪②の前面には内柵形状の出入口が設けられ、さらにその先には土橋を設置した大堀切が存在する。

尾根先端部の南西斜面には堅堀のような痕跡が見られるが、これは防衛遺構といふよりも山麓から山上へと上がる道の跡と考えられる。

曲輪①から南方の深い谷を降りた箇所には曲輪③が存在する。曲輪③は地形の制

約を受けているため規模は小さく、一角には堤のような窪地が見られる。曲輪③は、山麓へ向って緩やかに傾斜していき、途中の大土塁が曲輪③と山麓間を遮断するように構築している。前述した曲輪②の前面にある大堀切は堅堀となってこの大土塁の脇を通ることから、現状では確認できないが、土塁の横に深い堀が存在した可能性がある。なお、大土塁は一部大きな破壊を受けている。これは、曲輪③から山麓へ進む途中の斜面に近年まで使用していた石切場の跡があり、その石を曳き出すために土塁を減失させてしまったためと考えられる。

曲輪①から谷部（曲輪③）を挟んだ標高三六〇mの山上部には曲輪④が存在する。曲輪④は、南北に細長く三方に土塁を構築している。この曲輪から北西にのびる尾根筋には明瞭な城郭遺構は見られないが、尾根の先端部には曲輪⑤が存在する。ただし、曲輪⑤は前述した石切場によって大きく破壊を受けている。

本城の城主は、戦国時代に活躍した在地土豪二曲右京進で、後に本願寺の鈴木出羽守の子である鈴木右京進が入ったといわれている。主郭部の発掘調査成果でも当該時期を中心とした遺構・遺物を確認しており、本城は戦国期に築造され、約一〇〇年の間機能していたようである。

本城において最も顕著な城郭普請を見ることができる箇所は、曲輪①（主郭）から曲輪②までの範囲である。特に曲輪②は、内柵形状の出入口が見られ、その前面には非常に大きな堀切が存在する。全体的な縄張りの形態を見ていくと、当初の城域は、曲輪①の主郭から北西方に延びる尾根筋が城域であったと推測する。その後、曲輪②から派生する堀切や土塁、曲輪④・⑤を構築し、曲輪③を含む谷部を囲って城域規模を拡大した改修を施したと考えられる。

この場合、在地土豪二曲右京進が在城した時期は改修前の縄張り普請で、本願寺方の鈴木右京進の時に城域を拡大させたという考え方もできる。（田村 昌宏）

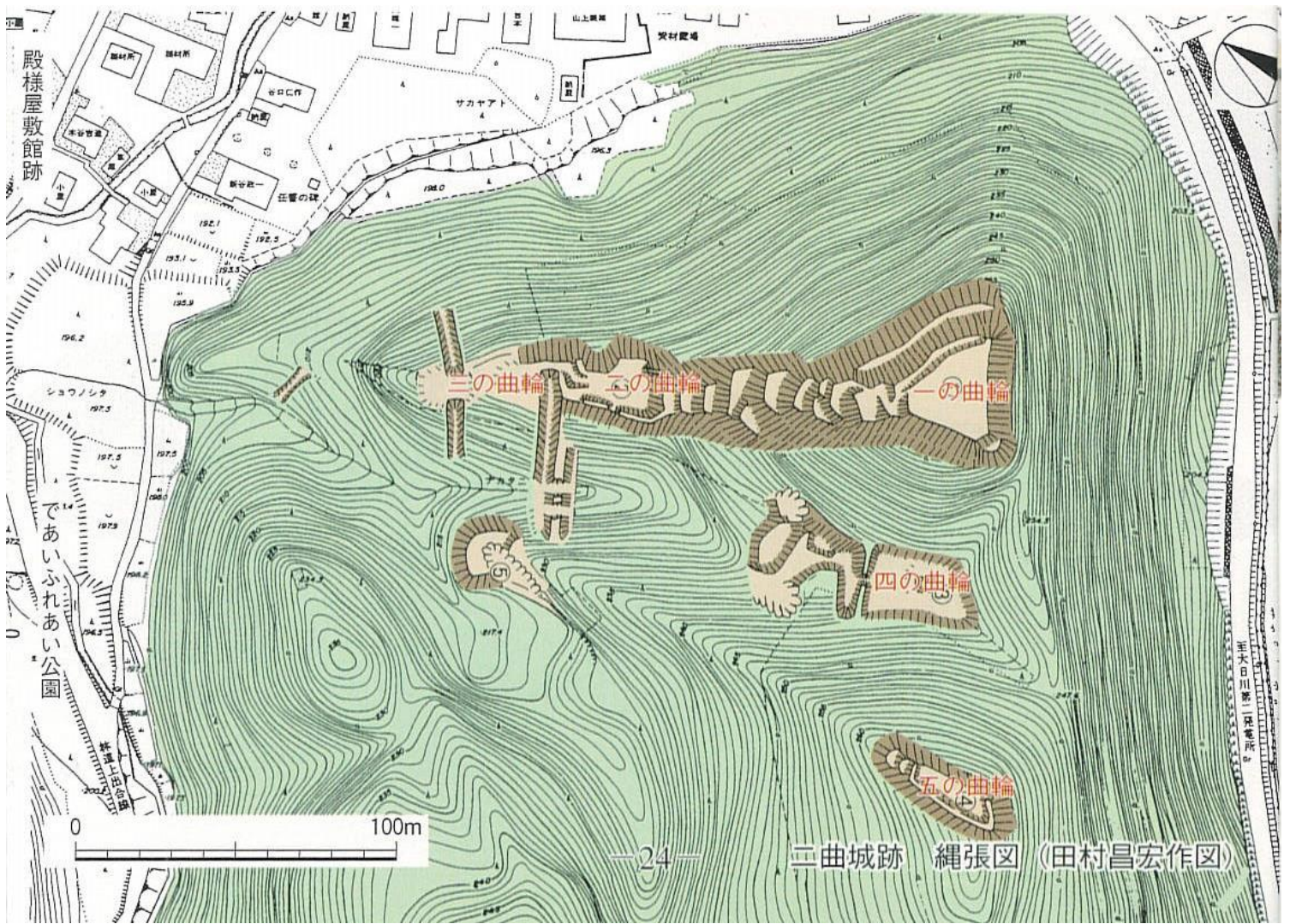
参考文献 西野秀和 「二曲城」 『日本城郭大系7』 新人物往来社 一九八〇

『史跡鳥越城跡附二曲城跡保存管理計画策定報告書』 鳥越村教育委員会

一九八七

田村昌宏 「二曲城の縄張り」 （『石川考古』第二二五号） 石川考古学

研究会 一九九三



二曲城跡平面図



二曲城跡主郭(一の曲輪)発掘状況



二曲城跡出土遺物